

ちよじとそいしやで

わがまち散歩

道すがら、心通わす人がいる
古里の温もりに包まれながら
あちらこちら、わがまち散歩

町の東方に位置する福田地区。秋ともなると栗や柿、これからはかんきつ類の栽培が盛んです。牧歌的な風景が広がる福田地区に伝わる歴史や物語を訪ねながら、心温まる人たちとの出会いがありました。

民話を伝える 福田寺跡

大気が澄み渡った空に、一筆書きしたような筋雲が浮かびます。こうべを垂れた稲穂が実る田のあぜに、彼岸花が秋の色を添え、すっかり秋です。今回、訪れた福田地区にはかつて朝来山を中心に、周辺の船野山などを含めて山岳信仰とした「福田寺」という山岳寺院がありました。山間の谷間に民家が点在する内



朝来山を上って行くと、中腹の左側にある三基の石造物。寺跡を今に伝えます



古墳の石室の中に置かれてある首のない石仏

寺地区。赤井川に架かる内寺橋を渡り朝来山の山道を上って行くと、中腹に福田寺の寺跡を残す石造物が三基たらずんでいます。辺りは竹林に覆われ、そこはかかない厳かな気が漂っています。福田寺の開基時期は不明ですが、かつての寺域内にあった五輪塔に文永8(1271)年という銘が刻まれていたことから、鎌倉期からの寺院であったことが分かっています。また福田寺は、町に伝わる民話「朝来山の鬼退治」にも登場します。

話には、知恵者の寺のお坊さんと、単純な性格の鬼とのやりとりがコミカルに描かれ、「鬼の目にも涙」や「来年のことを言う」と鬼が笑う」などのことわざにちなんだ話が登場します。いずれも益城弁で書かれており、読み進めるごとに笑いが吹き出します。これらの民話は、町の図書館で読むことができます。

ひっそりたたずむ 鬼の窟古墳

福田寺の寺跡を残す石造物がある場所へ向かう手前から、右に分け入った細い道を行くと、町指定文化財の「鬼の窟古墳」があります。これは、6世紀後半頃、一帯を治めていた豪族の墓とされています。推定墳径約10mの周溝を持たない



福田寺跡の手前にある町指定文化財の「鬼の窟古墳」

巨石古墳で、石室の構造は近くの山中にあった自然石をそのまま使ったり、あるいは加工してつくられているようです。

石室の中には、阿弥陀石仏が安置されており、福田寺の修行僧がここを修験窟として使っていたと伝わります。また、石仏の首が破壊されているのは、明治初年の廃仏毀釈によるものと考えられます。